

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第5回フォーラム研究会

逐語録

(木村) では、フォーラム研究会を始めていきたいと思います。

まず資料の確認です。一番上に議事次第があります。F5-0です。次が、前回の議事録案です。F5-1でお願いします。次に、第2回フォーラムの反省会メモです。F5-2でお願いします。次に、第2回フォーラムに関するアンケートの集計結果があります。F5-3です。次に、第3回フォーラムのスケジュール表があります。F5-4です。

ここから先は、第3回フォーラムで参加者に配布する資料になっています。最初に、「第3回フォーラム」と書いてある頭紙があります。F5-5です。次が、前回の模造紙を取りまとめた資料。F5-6です。ピンク色の「ブレインストーミングの進め方」がF5-7、青い「グループワークの進め方」がF5-8です。第3回フォーラムに関するアンケートがF5-9です。第4回フォーラム開催のお知らせがF5-10になります。ここまでがフォーラムで配布する予定の資料です。

その次は、宿題作成用のプリントです。F5-11でお願いします。これは事務局のほうで取っておくということになります。そして、第3回フォーラムの宿題に関して、実は参加者の皆さんにメールで補足説明をしました。それがこちらの文章です。F5-12でお願いします。最後に、模造紙の使い方に関する資料があります。F5-13でお願いします。13種類の資料になっていますけれども、いかがでしょうか。

それでは、早速今日の議題に入っていきたいと思います。大きくは、第2回フォーラムの振り返りと、第3回フォーラムの準備ということになります。

0. 前回議事録確認

(木村) まず、前回の議事録ですが、皆さんにはメールでお送りしていますので、ご確認いただければと思います。第2回フォーラムの準備状況について書かれています。何かあれば、今日の終わりまでに指摘していただければと思いますので、よろしくお願ひします。

1. 第2回フォーラムの振り返り

(木村) 次に、第2回フォーラムの反省ということで、F5-2とF5-3、あとはF5-6が前回の模造紙になりますが、この辺を少し見てもらってから、一言ずつ皆さんからご意見を

いただきたいと思います。それでは、20分くらいまで時間を取りますので、前回は思い出してください。

(各自資料に目を通す)

(木村) そろそろよろしいですか？

それでは、今回はこちらからだったので、こちらから行きましょうか。では、どうぞ。

—— 初回よりはうまくいったような気がするのですが、お互いの出方をすでに分かっているのに、流れに合う話し方をなさっているのかなという印象がありました。それで話がまとまってしまったのかなと思ったのですが、アンケートの専門家のご意見を見ると、専門家同士の壁はどうかという意見が出てきているので、また何か、表面上の議論とは別のことがあるのかなという感じもしています。

(木村) では、次の方。

—— 記録を見返していないので確認はできていないのですが、ファシリテーターと専門家の方の2人のやり取りが多くなってしまったことが気になりました。

あと、市民の女性の方の意見に対して、発火点というか、そこから話の流れが変わっていくというか、まとまっていくという傾向を感じました。他の皆さんも、その方を意識しながらしゃべっているというか。

それから、市民の方は、いろいろな思い込みはあったかもしれないけれども、まっさらに近い感じでこのフォーラムに参加しているのに対して、専門家の方は、自分の中である程度の意見を持って参加しているのかなと、アンケートの集計結果を見て感じました。市民の方からは発見的な意見が多いのですが、専門家の方からは、例えばQ2で、「もう少し踏み込みたい部分も」とか、「時間が足りなかった」とか、「整理する時間の不足」とか、ある程度自分の中でここは深めたいという意識があるのかなと感じました。それをグループワークの中で感じ取れたかということ、私自身はあまりピンと来ていないところもあります。

それから、Q3に、「ひざを突き合せて話せば、理解できる。無関心な人について、どうしていくべきかは、大きな問題と思われた」という意見があります。それから、「関心の無い人をいかに巻き込むか」という同じような意見があって、やはりここは専門家の中で結構議論されているところかなと感じました。以上です。

(木村) 確か、「他の人の意見も聞きましょう」とサブファシリテーターが指摘してくれているのですよね。まあ、盛り上がってしまうのでしょうかけれども、そこはそういうふう

にやっていたくしかないと思います。

—— 専門家の方も、「自分がトランスレーションしなければ」みたいな思いもあって、好意でやっているのだとは思うのですけれども。

—— そうですね。高圧的な感じではないのだけど、つい説明してしまう、みたいな。

—— そうですね。その結果、なんとなくファシリテーターとの会話が多くなってしまう。

(木村) ファシリテーターが質問をしてしまうのですよ。本当はおかしいのですけど。まあ、ある程度の質疑応答は仕方がないと思いますが。

ただ、あまりにも長すぎたり、ファシリテーターが時間のコントロールができなくなっていたら、今回みたいに、「他の人にもお話を伺ってみたらどうでしょうか」と言っていたくと思います。

—— サブファシリテーターが何回か声をかけていました。

(木村) ええ、記録にも全部残っています。

記録は、昨日の夜にホームページにアップしました。参加者の皆さんには、宿題の回収状況を踏まえて、この後メールで連絡しようと思っています。皆さんも、ホームページを確認いただければと思います。

では、次の方。

—— 今回のアンケートで、Q3で専門家2人、それからQ8で市民1人が、無関心層に対するコメントをしています。なぜこういった意見が出てきたのかよく分からなかったのも、議論の中身を読んでみたほうがいいなと思いました。

それから、Q3の市民の方で、意見を自分で見極めるとか、私自身も聞けるようになったという意見がありますが、話をよく聞くことができるようになって、自分の意見をきちんと整理できるということだったら、それは素晴らしいことだと思います。

無関心層に対してなぜ関心が出たのかがよく分からなかったのも、あとで記録を見たいと思います。

—— どこかの発表にありましたよね。

(木村) ひとつは、次回のテーマで出ているのですね。B班で、「関心のない人とどう付き合うか」というテーマが出ています。

—— Bのどこでそういう話になったのかがよく分からなくて。「質問への回答」の最後の矢印のところで、「市民は歩み寄りへの関心がないのでは」という付箋があるので、そこなのかもしれないのですが。

(木村) 記録だとどうでしたか？

—— おそらく、今おっしゃった通りの流れだと思います。B班の中で、「歩み寄り」という話題が出てきて、その中のひとつに「そもそも市民は歩み寄ろうとしていない人が多いのではないか」という意見があって、それが質問作りにも波及して、そして次回のテーマでも出たので、そういったことを受けてアンケートに書いた人が多かったのだと思います。

—— 「歩み寄り」という言葉が「無関心」という言葉に変わったということですか？

—— 「歩み寄りをすべきか」の答えのひとつに、無関心な人がいるのではないかと。ひとつの課題として、無関心というものがあるよ、という感じでしょうか。

—— 無関心な人は、歩み寄るとか寄らないとか、壁があるとかないとか、全然考えないですよ。

(木村) Bの2/3の一番下に、「お互いに努力しなかった結果(相手任せ)」という意見と、その逆で、「被害者が歩み寄りの必要はないのでは」という意見があります。

—— 面白いと思うのは、Q3で無関心のことを書いているのは専門家だけなのですよ。

—— そうなのです。ただ、Q8の市民の「お互いを理解しようとしている方々が多く参加しているのではないか」というコメントは、ひるがえって考えれば、無関心な人はこれには参加しない、ということかなと読んだのですけれども。

(木村) 私としては、無関心についてはぜひ1回話してほしいと思うのですが、なかなか投票に勝てないので、仕方がないですね。

—— 第1期は第3回のテーマがまさにそうでしたよね。だから、この問題意識は必ず出てくるテーマだと思います。

事故が起こる前の世論調査では、6~7割は無関心でした。無関心というのは、暗黙の支持層なのです。事故によって、そのほとんどが反対に変わるわけで。だから、無関心で

いてくれれば、推進側としては問題がない。ところが、無関心の人に話をすると推進に変わらなと思っているところが間違いで、説明すればするほど批判側に回るはずなのです。

(木村) だから、本当は、「なぜ無関心になってしまうのか」とか、そういう話題が出てくるといいなと思うのです。

(前参加者) そうですね。そこが非常に大事だと思います。

(木村) 第5回は、壁の話を一応出していますけれども、テーマを変えてもいいのかなと思っています。第4回までは参加者にテーマを決めてもらうけど、第5回は、今までの流れを見て、こちらでテーマを設定させてください、というのもありかなと。まあ、次回の様子を見て考えてみようとは思っていますけれども。

—— 第3回のテーマの「どんな情報を希望するか」というのは、その裏返しで、無関心の話も浮き彫りになる可能性はありますよね。

(前参加者) 無関心に関して、友人から、ついこの前、「なぜ話し合いをする必要があるのか」と言われたのです。「脱原発は脱原発でしょ」って。私としては、それは違うだろうという思いがあるのですが、そういう考え方の人がいるということです。

かと思えば、あるNPOの方なのですが、「とてもいいことに参加されている。応援します。話し合いほど大事なものはない」と言う方もいて、ホッとしましたけれども。

—— 本質的な話ですね。

(木村) 福島の中の住民同士の対話でも同じような話が出てきています。結局、そういうことがコミュニティ破壊につながっているのです。

—— それを見ていると、無関心が悪いことだとは思わないのですね。自分と違うグループの人を否定さえないで、認め合っていれば、無関心は無関心でいいのかなと。

(木村) そうですね、認め合っていれば。

ただ、「自分の世界に干渉しないでくれ」という感じなのです。それ以上に、「自分を否定する意見は聞きたくない」というようなところがあって。それで、自分にとって心地よい情報を言うような仲間同士で集まって、コミュニティができてくる。というのが福島の中でも問題になっているみたいです。

—— でも、福島で聞いたのですけれども、「美味しんぼ」について、「いや、自分たちは低線量被ばくを受けたのに、鼻血は出ないよね」と言っていて。原発の事故が起こる前は、よく分からないけど不安だと言っていたけど、今は、あら大丈夫って、そういうふうと思う人もいます。そういう人たちが出てきたっていうのは、自分の体で実証して思ったというのが強いので、

(木村) いや、それは半分なのです。

「別に全然鼻血が出ないからいいや」と思える人はそれでいいのだけれども、「いつ鼻血が出るのだろう」と思っているようなコミュニティもあって、しかも、その人たちは自主避難ができないから、していないのです。できたらやっているのですよ。そういう人たちをどうフォローしていくか。

一方で、自主避難している人たちは、今更、「福島は別にたいしたことないです」という情報は聞きたくないの、自分たちで反原発の運動のコアになっていく。そういう構図のようですけどね。

でも、お互いに違うことを言っているのだけど、干渉なく会話ができ、共有できるようなコミュニケーションを本当は作らなければいけない。でも、それが一番大変なのだろうなあ。

—— 難しいでしょうね。

(木村) 自分の言っていることが周りに認められないと、その人はスルーされるわけです。そうすると、スルーされる人は少数なのだけど、でも他に同じような経験を持っている人たちがやはりいて、それで集団化していく。ということらしいですよ。

(前参加者) 口をつぐんでしまう方もたくさん出てくるのでしょうかね。

(木村) すみません、脱線しました。では、どうぞ。

(前参加者) 去年参加者だったものですから、どうしてもそこに考えが行ってしまうのですけれども、市民側のお話が本当にまとまっている。それでいいのかな、と思います。去年は、いろいろな意見が出たような気がするのです。もっと広がっていたような気がするのですね。1年の月日がそうさせたのか、参加者が違うことでそうなったのか。まとまってしまうのはいいことなのかなと考えていました。もっと広がってほしいなと思っています。

(木村) 私もっと広がってほしいのですけれども。アンケートの最後に、専門家の意

見で、「原子力だけで話すことに限界を感じる」というものがあって、私も、早く原子力話題から脱出してほしいと思っているのですけれども、なかなか出ていかないのですね。

—— このままだと、ずっと原子力の話題ですよ。何回も、違うものでいいですよと言っているのですが。

(木村) 限定していないことになっていても、原子力になってしまおう。

—— そこを話したい人が多いのではないのでしょうか。

(木村) まあ、意見にもあるように、初めから全体を論ずることも困難なので。たぶんここでしょうね。ある話題で集まって、話して行って、では、そこから外の世界にどう展開するか。あまりこちらが誘導しすぎても駄目でしょうし。その辺が難しいなと思っています。

(前参加者) あと、Q3 に、「関心のない人をいかに巻き込むか」とありますけれども、巻き込まないで、というか、そんな表現しないでほしいと思います。そういう意識だと、ちょっと困るかなと思います。日本語は難しいので、こういう表現になったのかもしれないのですが。

タイムキーパーとしての反省は、立ち位置をしっかりと考えたいと思います。

(木村) ありがとうございます。では、次の方。

—— B 班と C 班には共通点があって、「専門用語を使っている」とお互いが言っているのですよね。市民も言っているし、専門家も言っている。そこがひとつの大きなギャップを作っているのではないかという気がします。ところが、A 班ではそういう話題が少なく、班によってそういう特色があったのかなという感じがしました。

最近、ある方に言われてハッと気がついたことがあります。専門用語は、一般の人が判断するのが難しいと。ある方が言うには、福島では、津波や地震で亡くなった人よりも、関連死の人が増えたのですよね。なぜ増えたかという、どこかに退避しなさいと移動して、心臓とかそういう人が増えていると。では、1 ミリシーベルトにしなければいけないのかというところが、本当のところは理解できていないのではないかと。いろいろな専門家が言うものだから、専門家の言うことをますます信用しなくなっているのではないかと、言っていました。私は、ハッと気がついて。本来なら、「このレベルだったら住んでもいいですよ」と言う専門家がいてもよかったのではないかと。そういう原子力全体を見える人が少ないと、その方は言っていましたけれども。

一般市民は、いろいろな専門家がいろいろなことを言うものだから、原子力のことはあまり信用できないのではないかと、不信を持っているのではないかと指摘されて、つながっているのかなと思いました。風が吹けば桶屋がもうかるじゃないですけども、専門用語は大きな壁になっているのではないかと感じました。

(木村) 心配とか安心とか安全というのは相対的なものなので、それを科学的に扱っているような振りをするのが本当は駄目なのですね。結局のところ、認知の問題になっています。結局、人間はほしい情報がほしいだけなので、それを集めるわけですから。

—— しかも、不安のほうに行くのですよね。安心するよりは、ここは注意しなければいけない、食事もこういうことを考えないといけない、水も考えないといけない、という側に行く。

(木村) まあ、必ずしもそうでもないみたいですけども。

—— 「美味しんぼ」は、ひとつのいい例だと思います。専門家が「このレベルは問題ありません」と言っても、実際に鼻血が出た人もいるはずだと。「それはおかしい」と言うのもおかしい。要するに、人間にはものすごく幅があるわけだから、ある人は「大丈夫、大丈夫」と言っている、そうではない人もいるから、「大丈夫」と言うと、「何か変だな」と思ってしまう。

私がこのあいだ話した先生は、「そういったことが、福島がまだ危険だという風評被害を与えている、ということを理解していない人が言っている」と言っていました。元町長でしたっけ、「私は鼻血が出たのだから、それは認めない」とか言っていた。それによって、他のところが被害を受けて、ものを買わないとか、観光に行かないということになる。自分が言うことの重さが分かっていない、と言っていました。科学と人間の心理は違うということを理解しないとイケないというか。

—— 直接原因ではないけれども、間接原因になっている可能性は多分にありますよ。コミュニティが崩れていて、自分の経済的環境も非常に悪くて、これからどうしたらいいのだろうかというストレスが増えて、そうすれば血圧も上がるだろうし。鼻血が出る可能性は多分にある。放射線との直接の因果関係は考えづらいいけれども、間接的には多分にありますよ。だから、そういうことを主張している人の言い分にもある程度耳を傾ける必要はあると思います。

—— 専門家と称する人が「そんなレベルではない」と言っても、それはその人にとっては受け入れられないことだと。市民の気持ちを全然分かっていないというふうに見るので

はないかと。それが大きな壁になっていますよと。

(木村) はい。では、次の方。

—— 録音データを聞いた感想を述べたいと思います。

C班に関しては、反省会でコメントしました。それ以上のことは特にありませんでした。

B班は、雰囲気として、かぶせ合いが多かった気がします。ただ、これは、そういう傾向の人が集まっていたからそうなったのかなという感じもあります。

—— かぶせ合いってどういうことですか？

—— 相手が話している途中で、「いやいや」って割り込むことです。

(木村) それは記録には残っていないのでは？

—— 話が句点で止まっているときは、次の人がかぶせているということです。

(木村) そのときにはちゃんと「いやいや」って入れていますか？

—— 「いやいや」と言っているときは入れています。そう言わないで割り込む人もいるわけですよ。

—— パッと人の話にかぶせて話し始めて、前の人は黙ると。

—— そうです。「私はこう思います。」まで言い切っていないのに、次の人が、「これについてはね」と言い出してしまうシーンがありました。実は、サブファシリテーターもそれをやっていました。気をつけてください。

—— それは、ファシリテーターが機能していないということですか？

—— ファシリテーターにそこまで求めるのは酷ですよ。

—— そういうときにサブファシリテーターがどうするかをちゃんと話しましょう。そうしないと、次に活かさないですよ。

—— 話が長いということもあるのですか？

—— そういうわけでもなくて。

—— 活発なのでしょう？

—— 自分の意見を言いたい人がたくさんいたと。

—— かぶせてくるのは専門家の方ですか？

—— 両方ですね。B班のほぼ全員がそうでした。

—— でも、活発という意味ではいいのですよね？

—— いいのですけれども、日本語は結論が最後に来ることがあるわけで、そこを聞かないで決めつけて話し合っていると、コミュニケーションとしてはよくないのかなという気がします。

一方で、参加者間でも、「いや、今はこの方が話しているのだから」というシーンがあったのですよ。

—— そう、ありました。

—— 参加者同士でも、気づく人は気づいている。

—— では、ひとつのポイントとしては、最後まで聞きましょうということを強調すると。

—— あと、B班は、議論が分断している時間がありました。最後のほうで、サブファシリテーターさんが2人がかりでファシリテーターさんに「もういいですよ」などと小声で話していて、その間、こちら側はまだ議論をしていた。残り3分くらいだったので大きな被害はなかったとは言えますけれども、注意していただければと思います。

—— 皆さん、今のご指摘の意味は分かっていますか？ 要するに、こちらで1つの作業をし、こちらは関係のない話をしている。それはやめましょうということです。同じグループなのに、サブファシリテーターとファシリテーターが「もういいですよ」ってやっている。その他の人は、それとは別の議論をこちらでしている。それはやめましょうと。

—— サブではない人たちが話していたのは、テーマに関する議論ですか？

—— 何の話かに関わらず、皆で一緒のことをやりましょうということです。サブファシリテーターとファシリテーターが見える化のことを話しているのだったら、皆も一緒にそれをやりましょうと。

—— あと、今、サブファシリテーターが2人がかりで、とおっしゃいましたか？

—— 録音では、そういうふうには聞こえませんでした。

—— サブファシリテーターが2人がかりでやるのはなおさらまずいですよね。例えば、1人が確認事項をしていたら、もう1人は話の流れを補助していくとか。

—— 今のお話は、Bの2/3ですか？ 3/3ですか？

—— 3/3です。②の質問のすぐ下に矢印が付いていますよね。この矢印が出て、「②は①と結局同じではないか」という話になって、一瞬話し合いが終わったような雰囲気になったのですが、こちらに専門家の付箋が2枚ありますように、まだ専門家はテーマについて話をしていたのです。その間に、「もうこれでまとめていいですよ」というひそひそ話が別のところで発生してしまった。

ただ、その専門家の意見が書き留められているので、サブファシリテーターさんは聞いてはいるはずなのですよね。ただ、ファシリテーターさんはおそらくこの話を聞いていないと思います。明らかにパラレルで話が進んでいたのです。ずっと2人がかりだったかどうかは分かりませんが。

—— B班は、この議論をしているときに、確かにそんな感じになっていましたね。

—— ええ、そうなのです。全体として、もう②は議論しなくていいよね、という雰囲気になってしまったので、まずいなと思って、何とかしようと思ったのですね。それで、ボソボソといろいろ言ってしまったのだと思います。

—— 傍で見ていると、せつかく2つに分けたのだから、②も少し深めたほうがいいのにな、という印象はありました。まあ、似ていることは似ているのだけれども。

(木村) B班は、時間も足りなかったのですよね。②に移ったとき、あと5分だったので。

—— なので、深められなかった。

—— 時間内に収めようとしたのですね。②がまた広がっていったら、5分じゃ足りないよ。

(木村) ただ、ここで出てきた話が、「無関心」の話にも効いてきた部分だと思います。

—— ああ、そうなのですね。

—— では、最後まで言っていていいでしょうか。あとは、A班とC班に該当する話です。反省会のときに、「こういうことについて話し合ったらどうですか？」みたいなことを言ってしまった。だけど、違う方向に行った。あるいは、A班では、「サブファシリテーターに任せておけばいい」と言われた、みたいな話があったと思います。それを聞いていて思ったのは、サブファシリテーターがいいなと思ったのと別のところに行ったら、誘導していないと思ってもいいのではないかと。逆説的な感じですが。ちょっと今日は言いすぎちゃったなと思っても、参加者の方が強い方だったら、参加者がちゃんとやってくれますし、逆に、引きずられてしまうかもしれない。そのひとつの指標としてどうかと思いました。以上です。

(木村) はい。時間もないので、どんどん行きたいと思います。

—— アンケートのQ4に、「コミュニケーションのステップ」をどのくらい達成できましたかという変化が書いてあって、特に3番の「異なることを受け入れる」で、専門家が5人に増えているのは、こちらとしてはうれしいことかなと。ここで木村先生に聞きたいのですけれども、1番から3番の専門家の人数が全部5人ですが、これは全部同じ人が丸を付けているのですか？

(木村) 必ずしもそうではありません。

—— だとすると、分析のしがいがありますね。

もうひとつは、5番の「相手が変わろうとしていることを知る」は、市民が0名から3名に増えていますが、4番の「自分が変わろうとする」の専門家はそれほど多いわけではない。だとすると、この3人の市民は、同じ人を見てそう思ったのか、相手は変わろうと思っていないけど変わっているなと思って見ているのか、そこら辺は興味があるので、この3人がどういう人で、どういう班か、というところはもう少し見ていきたいと思います。

(木村) ちなみに、4番に3.5人と書いてあるのですけれども、他の番号ははっきり丸を

付けていたのに、そこだけ自信なさそうに小さく丸をつけていたので、0.5でカウントしてみました。

では、次の方。

—— 1つは、私は、壁を越えるというのは、専門知識を共有するということではなくて、お互いにある人がどういう意見を持っているかということを知るコミュニケーションができる、ということだと思っています。そういう意味では、今の段階での参加者の皆さんの意識は、まだまだ専門知識を知ることによってウェイトが置かれていて、相手がどういう不安を持っているのか、どういう気持ちを持っているのかということを理解しようとするところへのウェイトが少ないのかなど。そこが私は気がかりです。専門家は、何百時間も授業を受けています。それでも十分に理解できない専門家も多い。だから、「専門家間の壁の解消」という議論は、私から見ると非常にナンセンスで。まだ、知識を知ろうとするレベルに留まっているところが残念です。お互いの理解のほうにウェイトが移ってくれることを強く期待しています。どのようにそれが展開していくのか。そこが非常に興味深いですね。

2つ目は、フォーラムからは少し離れるのですが、先ほど話題が出ていたので、鼻血の話、あるいは関連死の話について、述べたいと思います。福島に限らず、東北地方全体の震災関連死というのは3千人くらいいらっしやって、福島県以外の地域の関連死は、1年半くらいでほとんどゼロに収束しました。ところが、福島県だけは、3年経ってもまだ収束しない。累計1500人くらいの方が亡くなっている。放射線で亡くなったわけではないのですが、1500人の人が亡くなるというのは、ものすごく大きなことです。強制的に避難をさせたこと、あるいは、それが3年間も続いていることが1500人の命を奪っていることは明らかです。コミュニティを破壊したり、経済環境を破壊したり。私は非常に心が痛んでいます。

私が小学生、中学生のときは、東京の放射能の環境は、自然放射線の1万倍高かったです。100ミリシーベルトと言っても、自然環境の100倍です。だから、我々の育っていたときの放射能環境に比べれば100分の1です。ですから、私は、100ミリシーベルトで放射線の影響があったと全然思えない。私たちは1万倍の世界に育ったわけです。私よりも少し若い人たち、80年代に小学校、中学校を過ごした人は、1000倍のレベルでした。中国しか核実験をやっていなかったから。私たちのときにはアメリカも旧ソビエトもやっていたから、1万倍でした。それに比べれば、福島の人々は、避難しないでそのまま暮らしていたほうが、おそらく結果的にはよかったのではないかと。青森とか宮城とか岩手の人たちも、避難して、震災関連死で亡くなっている人もいます。

私は、避難のあり方というのは、根本的にどこかで学術的に分析して、考えなければいけないという気がしています。こんなことを言うと物議を醸すだろうけど。だけど、これは石川迪夫さんも私とまったく同じセンスであちこちに書かれています。先ほどお話ししたように、鼻血の問題も、元々の生活環境を壊したのだから、それは事故がなければそんなことにならなかったから、事故が最大の原因だけど、やはり避難ですよ。避難を本当に

しなければいけなかったのかということは、本当は検証しなければいけない問題だなと。以上です。

(木村) ありがとうございます。では、時間もないので次に行きます。そちらの方はいいですか？

—— 前回、フォーラムに参加できなかったの。

(木村) では、そちらの方。

—— この前も言いましたけど、前もって模造紙にきちっとテーマとかを書いておいたのはよかったので、あれは継続したほうがいいと思います。

アンケートについては、「ファシリテーターが難しい」とか、「ファシリテーターが下手」と書いてありますよね。難しいと思っている人はいいけど、下手と思っている人がいるのだったら、どうして助けてあげなかったのかなと思うのですよ。だから、もう次回は 3 回目なので、「皆さん、ファシリテーターをもう少し助けてあげましょう」というようなことを言ったほうがいいかなと思いました。

あと、Q8 で、専門家の人が、「何を発表すべきかをレジュメに記載願いたい」と書いていて、市民の人がそう言うのは分かるけど、専門家で発表に慣れている人もそう言うのかと思うので、例えば、「その班の全体の話の流れと、どういうところで盛り上がったかを発表しましょう」とか、きちんと書いてあげるべきなのかなと思いました。

(木村) そういう意味では、第 3 回の進め方には偶然書いてあるので、大丈夫です。

—— ああ、そうですか。では、そこははっきり皆さんに分かるように説明したほうがいいと思います。

もうひとつは、第 1 期もそうだったのですけれども、専門家の女性は、専門家であり、家庭人でもあるということで、二重に思いがある。このあいだもそういうご意見があって、私としてはすごくいい話だなと思ったのですが、あまりそのことが感想に出ていないのは残念だなと思います。

これは難しいと思うのですが、専門家が 10 人だったら、男性 5 人、女性 5 人にすれば、女性が話しているときに皆がどうやってうなずいているとか、男性が話すときに皆がどこに反応しているとか、お互いに見るチャンスがあっていいのだろうなと。ちょっと残念だなと思います。

(木村) 1 点目の「ファシリテーターが下手」は、本人が本人のことを言っていて、これ

は自分の反省です。アンケートを集計するときに、たぶん意味が分からないだろうなと思いつきながら書いていましたけれども、本人です。

—— 運営に対する批判ではないのですね。

(木村) ではないです。なので、そこはご安心ください。

では、次の方。

—— 先ほどもありましたが、模造紙の準備をする時間があつたので、グループワークが始まってから、落ち着いて作業に入れたのはよかつたと思います。

それから、C班の模造紙のデータを見てみると、先ほど無関心な人が多いというような話がありましたが、C班でもそういう話が出ていたのですね。専門家の「市民のイメージ」として、「原子力自体に興味を持っている人が少ない」という意見が出ています。

それから、市民の「専門家のイメージ」で、「専門用語が多くて分かりにくい」、そういうことからとっつきにくくなってしまうのではないかと、という意見があつて、それに対して、専門家のほうから、「市民にももう少し勉強してもらいたいですよね」という意見があつたのですけれども、だからといって、それに対する反発はC班の場合はあまりなかつたように思います。「確かに」みたいなところがあつたのだと思います。

私自身の感想ですけれども、今回のフォーラムだけでなく、ずっと思っていたことなのですけれども、市民が「漠然とした不安」と言つたって、結局、専門家の方は市民に対して何をどう説明したらいいかが分からない、という部分もあるのではないかと思うのです。今度のタイトルになっていますけれども、何を要望されているか。ですので、次回のフォーラムでその辺が深まることが楽しみだなと思つています。市民も、ただ「漠然と不安」だけではなくて、どこがどのように不安なのか、それをどういうふうに説明してもらつたら、少しは安心、まではいかななくても、納得がいくのか。「何が分からないのかが分からない」というのが一番よくないと思うのですね。なので、そこら辺が市民のほうももう少し整理されていくといいなと期待しています。

(木村) はい。第3回の設計については、皆さんに後半見てもらおうと思つています。宿題を出してしまったので、逆に難しくなっている可能性はあるのですが…。宿題を出さずに、例えば、第3回は「市民は何を知りたいのか」だけに特化して、それに対して、第4回は専門家に回答を作つてきてもらうことに特化する、なんていうのも面白かつたなと思つたのですけれども、まあ、もう出してしまったので、その中でできる方法で考えていますので、そこはそのときに議論しましょう。

では、次の方、どうぞ。

—— サブファシリテーターも話をかぶせてしまったというのは、大変申し訳ありませんでした。サブとしては、スケジュールをある程度守っていこうとすると、ある程度の時間の誘導は必要なのか、それとも、例えば 2 つのテーマがあって、①のテーマが盛り上がったときに、もう②はなしにして、①を広げていったらいいのかとか、そういうジレンマがあるわけです。

ファシリテーターが自分の意見を言いすぎたりするときに、サブファシリテーターとしてどうやってブレーキをかけたらいいのだろうか、というところもあったので、やはり基本的なルールを、木村先生が最初にきちんともう 1 回話していただくと助かるかなと。

あと、話が長すぎるときは、目の前にポーズでもいいから砂時計を置いて、長いですよ、1 分経ちましたよ、みたいな感じで、それはサブが抑えられるところなので、そういうところに気をつけたいと思いました。

(木村) 砂時計をファシリテーターに使ってもらうのは難しいと思うので、長いと思ったら、サブファシリテーターが使うようにしてください。

—— 時間管理に関してですが、残り 15 分のアナウンスって、参加者に聞こえている感じですか？ あまり聞こえていないのではないかと思っています。

—— でも、前はメモで渡していたから。

—— それはサブファシリテーターに対してですよ。

(木村) サブからファシリテーターに伝えるようになっていきますよね。

—— ファシリテーター以外には伝えなくてもいいのですか？

(木村) ファシリテーターに時間を教えて、それを踏まえてファシリテーションしてもらえばいいと思います。

—— ああ、別に、あと 15 分だからそろそろ、という感じの雰囲気を出せという話ではないと？

(木村) ではないです。そこまで縛るわけではない。

—— でも、ファシリテーターが、「あと 15 分だそうですから、皆さん頑張りましょう」と言うのは自由なわけですよ。

—— そのときは、メモをもらった私たちがファシリテーターさんに言ってしまっているのですよね？

(木村) 言ってもいいですけども、必ずしも、「だから次に行きましょう」と言わなくてもいいのです。

例えば、B班が、②に入ったけどまとまらなかったら、「②はまとまりませんでした」という話をしてくれればいいのであって、答えを出す必要はないのですね。それを徹底してもらったらいいのかなと。時間が足りなくなったら、時間が足りなくなったりのところまでを話してもらえばいいと。そういうことは、ファシリテーターが困っていそうだったら、助言してあげてもいいと思います。そうでないと、焦っちゃうし、話が盛り上がっているときに、よく「はい、ここまで」ってなっているのです。まあ、仕方がないですけど。ある程度時間管理もしないと何も回らないので、ある程度は必要なのですけれども。

—— なんか、そういう落としどころまでたどり着かないといけない、という意識が強すぎるのかもしれない。だから、まとまらなくてもいいということは最初に話したほうがいいのかもしれない。

(木村) まあ、私あまりそういう話をすると、ルールも何もなくなってしまうので、私はしません。ファシリテーターが困っていたら、無理に答えを導く必要はないということを、サブファシリテーターさんがこそっと言ってあげてもいいかなと思います。

—— グループとして結論を出さなくてもいいということですよ。

(木村) そうですね。まあ、ある程度話し合っただけで、皆で共有したものが図になってくるので、そのプロセス自体がある意味ではまとめになっているはずなので。まとまっているところまでを話してもらえばいいと思います。「ここまでは話し合ったのですが、ではどうしたらいいかというところは、時間が足りなくて話せませんでした」ならそれでいいはずなので。

—— そこは発表者の意見を優先したほうがいいのかもしれないけど。

(木村) だから発表者もくじ引きにしている、いろいろな人の発表を聞こう、ということですよ。

さて、では次の方に行きましょう。

—— ほとんど皆さんが言ったことと重なりますが、Q3 で、「専門家といっても、いろいろな方がいるということ。意見を自分で見極めなければいけないと思った」と書かれた方がいましたけれども、ここに私は熱心さを感じました。それから、いろいろな方がいるということが分かったということが、よかったなと思いました。今回の市民は、皆さんが言われているように、熱心だし、素直で、専門家が言ったことを丸のみしているような人もいるように見受けられるのですけれども、それでも、専門家の中にもいろいろな人がいて、いろいろな意見があるのだから、自分なりに勉強して、見極めていかなければならないのだなと思ってくれたと思うので、できる範囲で勉強して、自分なりの意見を持っていく、判断基準を持っていく、ということに気がついた人がいたということは素晴らしいと思いました。

あとは、無関心に関して、Q3 の専門家の中に、無関心な人についての意見がいくつかあるわけですが、「関心のない人をいかに巻き込むか、巻き込む必要があるか、ということは、本質のようでありながら、これまで議論していなかった（自分が）」と書いてあるのですけれども、こういうことを気がつかないままの方もいらっしゃるのだなと。まあ、この「巻き込む」という言葉に私は特に反論はないのですけれども（笑）。議論に巻き込むとか、コミュニケーションの中に入ってもらおうか、というくらいの意味で使っていると思うので。こういうことに気がついていただけだったので、よかったのではないかなと思います。

あと、全体的には、やはりコミュニケーションが確実に深まってきて、議論がよくできる状況ができつつあるのかなと思いました。以上です。

（木村） ありがとうございます。では、最後になりましたが、どうぞ。

—— 私は、むしろ、専門家と市民というふうに分かれないで話せるテーマでコミュニケーションを取っていただいたほうが、気づきが多いのではないかという気がします。だから、なるべく原子力に関係ないテーマを早く話していただけるといいなと思っているけど、どうもそうならない感じがあって、そこが残念です。対立構造みたいな感じでコミュニケーションを取っても、やはりそこは越えられないと思うのです。例えば、このあいだの都議のセクハラに関してどう思うか、みたいな議論したほうが、発見や気づきがあるのではないか、という気がしているのですけれども。以上です。

（木村） 第5回を捨て駒にして、実験に使うのはひとつの手だなと思っています。5回目だけど、原子カムラについては4回目までで十分に話しましたね。なので、事務局として、全然関係のないテーマで話すことを提案したいとか、第5回は少し工夫しようと思います。

—— 見ていて思うのは、まず自分の興味を満足させてからでないと、壁を越えるという

テーマに移れない、というところもあるのかなと。だから、まずは第 3 回で自分の興味を満足してもらって、それでようやく違うテーマに行けるのかなと。

—— でも、5 回やっても満足しないと思いますよ。だって、市民は聞きたいことが山ほどあるし、専門家は市民が聞きたいことではないこと言いたいことがたくさんあるのだから。

—— 5 回では満足できない？

—— できないと思います。だから、まったく関係ないテーマで、皆さんが一番関心のありそうなテーマで話し合ったほうが、「ああ、コミュニケーションってこういうことができるんだ」という気づきが早いのではないか、という気がするのです。

—— ファクトベースというか、第 3 回では原子力の知識についてやるわけで、ここで今までもやもやしていた話にけりがつけば、木村先生の狙っているところにたどり着ける可能性はありますね。

(木村) では、その辺につながるということで、後半では、スケジュールの確認と、グループワークの進め方についてディスカッションしたいと思います。その前に、一旦休憩にします。では 50 分まで休憩にします。

2. 第 3 回フォーラムについて

(木村) それでは後半を続けていきたいと思います。

まず、宿題について、補足のメールを送っていますので、その内容を確認したいと思います。F5-12 をご覧ください。先週の半ばにメールを出しました。

第 3 回フォーラムのテーマは、「壁を越えるために、何をどう伝えるべきか?」「市民がわかりやすい原子力情報とは?」です。宿題としては、市民参加者には「どんな情報を希望するか?」、専門家参加者には「分かりやすい原子力情報の案」を書いてくださいとお願いしていました。

その後、いろいろ考えたのですが、「何をどう伝えるべきか?」とあるのですけれども、「何を伝えるべきか?」だけに特化しないとどうにも收拾がつかなかったなので、その議論ができるように調整してしました。

市民の「どんな情報を希望するか?」に関しては、かなり限定した聞き方にしました。「原子力について、こんなことを知りたい」ということを書いてください。また、なぜそれが

知りたいのか、その理由についても書いてください。ということで、どんな「トピック」が知りたいか、ということについて書いてくださいと暗にお願いしています。だから、「分かりやすい情報がいい」ではなくて、「こういう物事について知りたい」という意見が出てくるだろうと期待しているということですね。

専門家参加者については、「分かりやすい原子力情報の案」ということで、「ベクレルとはこういうことです、みたいなものですか？」という質問に対して、私もそうですと答えています。が、「原子力について、こんなことを伝えたい」、もっとも伝えたい情報を、分かりやすく工夫して書いてみてください、とお願いしています。また、第3回のフォーラムの進行上、なるべく宿題プリントに要点をまとめて書いていただき、それを3分程度で話せるようにしてください。その他にいただいた資料は、参考資料として、一緒にコピー、配布します。ということで、専門家参加者には、3分で話せるようお願いをしています。

以上を頭に置いて、第3回フォーラムの計画を見ていきたいと思います。大きな流れをF5-4のスケジュール表で確認していきたいと思います。

まず、最終打ち合わせは前回と同じく11時から30分程度でやりたいと思います。

11時半から60分で会場準備等。

12時半から受付開始です。

13時にフォーラム開始。ええと、総合ファシリテーターは来られるのですか？

—— 来られないそうです。

(木村) 元気ネットのどなたかがされるのですか？ それとも、私？

—— 予定はしていないですけれども。

(木村) では、私が総合ファシリテーターもやります。

13時から挨拶と自己紹介ということで、第1回、第2回に欠席された方は最初に1分話してもらおう。その他の人は30秒です。

次は、前回の振り返り、10分ということで、第2回と同じように、目標やコミュニケーションのステップをもう1回確認して、あとは各自附箋を読んでもらうという感じにしようかなと思っています。

—— そのときに、総合ファシリテーターが木村先生で、その次も木村先生で、その次も木村先生ということになると、声のトーンが同じになるので、例えば最初の挨拶だけは違う声の方にしていただいて、アクセントをつけたほうは、聞くほうは変わったなという印象があるのではないかと思います。

(木村) では、神崎さん、最初のところだけ、やってもらっていいですか。

—— 録音の了解とか、「さんづけ」の話とか、最初の事務的な話。

(木村) 本当は、資料確認と、スケジュールの確認までやっていただけると助かるのですが。そのあとを私のほうで引き継ぎます。

(神崎) はい。

(木村) それでイントロダクションが終わります。

そうだ、A3の紙がありますね。あれは3セット作るのですけれども、もう1セット作って、私の座っているところの横の柱に貼っておきましょう。そうすると、私はそこを指して話せるから、そっちのほうがいいと思います。

では、次はグループワークです。今回のテーマは、「壁を越えるために何をどう伝えるべきか?」「市民がわかりやすい原子力情報とは?」ということなのですが、私が考えたのは、前半は専門家から市民へのメッセージということで、最初に専門家から、1人あたり3分で、全体に発表をしてもらいます。それに対して全員が感想を1~2分で書いて、それを回収して、その専門家のところに持っていくという作業を、全員分やります。1人持ち時間5分で、45分取っています。

その後、グループワークになります。詳しくは後で話しますが、専門家が書いてきた宿題用紙を見ながら、それに対してどういう意見が来たかというのを、専門家が自分で紹介しながら貼って行って、それに対して周りの人がいろいろと感想を言い合うという内容になります。15分しか取れていないのですが。まあ、感想を貼った後に何か発表するというのは特にないのですけれども、自分が伝えたいことに対して、どういう反応があるのかを確認できる場をしながら、しかも模造紙という形で皆で共有できるように、記録に残せる形にしておきたいと思います。これが前半です。

前半の進め方の説明から、グループワーク1終了までで、65分取っています。

ここで10分間休憩を取ります。

後半は、市民から専門家へということで、グループワーク形式にしていきたいと思います。詳しくは後で青い紙で見えていきます。時間は55分です。グループワーク2の後は、全体共有の時間を取っています。

15時50分でグループワーク2が終わって、15時50分から次回のテーマについて20分間で話し合ってもらって、投票をする。

その後、16時10分からは振り返りです。この辺は前回と同じスケジュールです。

以上が、私が考えたスケジュール案になります。

確実に決まっているのは、イントロダクションの 25 分。これは、もしかしたら 20 分くらいになる可能性があります。前は、5 分遅れて始まって、だいたい時間通りに終わっていましたよね？

—— 時間通りというのが、13 時 25 分に終わった、という意味で言っているなら、違います。結局 5 分遅れは縮まず、イントロダクションが終わったのは 13 時 30 分でした。

(木村) グループワークの進め方が終わって、ではなくて？

—— 挨拶と自己紹介が、15 分の予定が 16 分半で、前回の振り返りが、10 分の予定が 9 分なので、ほぼ定刻です。つまり、5 分遅れでそのまま進んでいます。

(木村) 減っていないのか。進め方の読み上げはどうでしたか？

—— グループワーク 1 の進め方は、7 分かかっています。

(木村) え、読み上げただけなのに 7 分かかっている？

分かりました。では、あまり縮む見込みはない。そうすると、25 分かかるので、ここは固定です。あと、次回のテーマ決め以降も固定なので、その間の時間、だいたい 2 時間 20 分、休憩を入れると 2 時間 10 分でグループワークをすることになります。

次は、F5-8 のグループワークの進め方をご覧ください。

前半は、「専門家から市民へ」ということで、全体への発表とグループワーク 1 をやります。

0 番、まずはこの用紙を確認しましょう。

まず、専門家は、全体への発表を行います。

1 番、専門家は、各自の作ってきた情報を全体に発表します (1 人 3~4 分)。

2 番、それに対して、聞いていた皆さんは意見や感想を付箋に書きます。1 枚につき、1 つの意見や感想です (1 分)。書いた付箋は、周りのサブファシリテーターに渡してください。発表者に渡します。

これで 1 人 5 分計算になるのですが、どこで発表するかというイメージが私の中でできていないのですね。

—— 全体というのは、A、B、C に分けて？

(木村) いや、席は A、B、C に分かれています。

—— 話す相手は全員です。

(木村) だから、全体共有と同じようなスタイルにするのですが、専門家がどこで話すのか。

で、その後は何をするかというと、専門家の発表がすべて終わったら、グループワーク 1 に入ります。

3 番、専門家 1 人が、と書いてありますが、この辺は少し変えるかもしれません、自分のプリントを模造紙の上部に貼り、その下に、全体からもらった意見や感想を、皆に紹介しながら貼っていきます。これは、F5-13 を見てもらえばと思います。模造紙を 3 分割して、上のほうに宿題プリントを貼って、下に他の方からの意見を貼っていくと。皆で意見や感想をグルーピングしてみましょう。時間があれば、さらに意見や感想を言いましょう。これを 1 人 5 分でやります。

4 番、終わったら、他の専門家について、順番に 3 番を行います。

資料ですけれども、冊子には全員分の資料が入っているのですが、それとは別に、自分で模造紙に貼る紙は余分に刷っておいて、受付で渡す、ということをやってください。ややこしいですけれども。だから、冊子に加えて、自分の書いてきた 1 枚を受け取るということになります。

—— 本人に渡すほうは、添付は要らないですよね？

(木村) 添付は要らないです。1 枚紙だけでいいです。

自分の書いた紙が戻ってくるわけです。要は原本が戻ってきて、それを模造紙に貼って、いろいろと話し合うというスタイルを考えています。

全体発表する前に、グループに分かれたら、専門家の人にはあらかじめプリントを貼ってもらいますか？ いきなりさらすのは嫌ですかね？

—— なんとなく、順番が逆のほうがいいような気がするんですけど。

(木村) 市民から始めるということですか？ なぜ私が専門家からにしたかということ、市民から始めると、専門家が準備したものがまったく意味がなくなる可能性があるからです。

—— 誰も興味がないことを専門家が話すという寂しい光景になる場合がある。

—— (市民が知りたいことを) 分かってから話すのは、きついですよね。

—— 専門家は、最初から自分のプリントが貼り出されたらびっくりすると思います。

—— サブファシリテーターが預かって、その人の発表が終わったら貼るようにすればいいのではないのでしょうか。

—— そのほうがいいと思います。発表した後だと思うのですよ。最初に貼ると、逆にミスリードする可能性もありますよね。

(木村) はい。

で、冊子はあるので、発表のときは、何ページを見てくださいということで、それを見ながら話すことになりますが、ただ、話すときに座っていると誰が話しているか分からないので、立ってもらおうと思うのですね。

—— A4のプリントを貼るのですか？

(木村) A4がいいか、A3に拡大コピーするべきか。

—— 鉛筆の人がいるので、濃い目で、A3にしたほうがいいのかもしいない。

—— A3にしても、どっちみち見えませんよね。手元にあるし、A4でいいと思いますけど。

—— あとでもらった感想や意見を、そのグループに帰って、貼るのですよね。その後グルーピングをするのですよね。模造紙をホワイトボードに貼っていると、皆で立ってそこに行き行ってやることになるので、やりづらいと思います。模造紙はテーブルの上に置いておいたほうがいいのではないですか？

(木村) ええ、その辺の動線をどうしようかなと思って。ホワイトボードに貼っておけば、発表者はホワイトボードのところで話すことができます。

—— そうですよね。で、グルーピングも立ってそこで行うわけですか？

(木村) 全員の発表が終わったら、模造紙は机の上に戻します。

—— でも、木村先生の席で皆さんに向かって話すほうが、皆に聞いてもらえる感じがし

ませんか？

(木村) ああ、そうでしょうか。前に出てきてもらって、その人の発表が終わったら、プリントを模造紙に貼る。そこはサブファシリテーターさんがやる。

—— なんとなくですが、プリントを貼るのではなくて、付箋に要点だけを書いて貼ったほうがよいような気がするのですが。だって、資料は全員に配るわけでしょう？

(木村) 配るのですけれども、どういう意見に対して、どんなコメントが出たか、という記録を残したいので。

—— 貼ったプリントの下に、皆さんのコメントがつくと。

(木村) そういうことです。

—— あとで模造紙のまとめを作るわけでしょう。ここに A4 のプリントを書き込むのは大変なのでは？

(木村) ただ、付箋に要点を書くと言っても、誰が、いつするか、なのですよ。そんな時間はないので。

—— やはり作ってもらった 1 枚をパッと貼るのが一番簡単だし、効率がいいと思います。

—— プリントを貼れば、模造紙だけ見れば全部分かるじゃないですか。何ページだっけ？っていちいちひっくり返しながらか議論するよりは、「その何行目の話をあなたは今言ったんだね」というのがパッと分かる。

—— だとすると、まとめ資料を作るときには、そのページを、うーん、

(木村) どこまでまとめ資料に落とし込むかは難しいです。

—— うん、それは難しいと思います。

—— まあ、でも、議事録参照でいいのかなど。発表のときに読んでいるわけですから。

—— 悩みどころですね。

(木村) ええ。模造紙のまとめ資料は悩みどころです。

ただ、話し合うときは、冊子を見ながらというよりは、模造紙にまとまっているとやりやすいだろうと思うので。

—— 発表に加えて、質疑応答があるのですか？

(木村) ないです。発表だけです。

—— 意見や感想というのは、単に書くだけですか？ 「言ったことが分からないのですけれども」とかの質問時間はない？

(木村) その場合は、「よく分からない」と書かれるということです。

—— 興味深いですね。

—— コメントは、市民からも専門家からも両方いただくのですか？

(木村) そうということです。自分以外からです。あ、我々は書きちゃ駄目ですよ。

—— でも、それを集めて、渡すのも時間が多少かかりますよね。

(木村) 結構かかると思います。発表は、3分程度とお願いしていますので、3~4分はかかるかなと。その後、1分くらいでパッと書いてもらって、書き終わったものを回収する。そういうことになります。

で、今の案だと、前に出てきて発表してもらおうので、そうすると各グループで感想を回収してもらって、

—— そのグループのサブに渡せばいいわけでしょう？

(木村) そうです。そうしたら、サブファシリテーターさんは、発表者に戻す。そういう動線になりますね。

—— だから、この3分の発表の時間管理をきっちりしましょう。途中でも切る。

—— この青い紙も、「3分」と書いたほうがいいと思います。

—— そうですね。そこをはっきりして、途中でも切る。それが公平ですよ。

—— 発表者は専門家だから、9人いるわけですね。A4のプリントを模造紙に貼る。その他の17人が聞いていて、専門家も市民も付箋を書くと。その付箋を模造紙に貼る。それで、グループワークになるわけですね。

(木村) はい。

—— 最低17枚の付箋とプリントが、Aの専門家だったらAのところに貼られる、ということになります。

—— それを見る人はA班の人だけだけど、他の班からもらった意見もそこには貼られていると。

—— そうすると、17人分を貼るだけでも大変ですね。

(木村) そうです。5分でできるのかどうか。

—— でも、そうすると、サブファシリテーターが発表の直後に感想を発表者に渡してしまうと、発表者は次の発表を聞かないで、感想を見たくなくなってしまう気がします。

(木村) そうですね。そうしたら、やはり模造紙はホワイトボードに貼っておいて、サブファシリテーターが感想も適当に貼ってしまうことにしますか？

—— 同じような感想は、グループ分けをしてあげるといいかもしれません。

(木村) それはもうこちらでやってしまいましょう。本当は本人にやってほしいですが、で、グループワーク1では、それを見て気づいたことを話し合ってもらいましょうか。

—— では、グループワークに入ったときには、例えば、Aさんに対する感想がグルーピングされて10数枚貼られているわけですね。それを、Aさんが、「私に対してはこういう意見とこういう感想がありました」って読み上げる形になりますか？

(木村) サブファシリテーターがそれを紹介するか、本人が読み上げるか、ということですね。私は、本人に見てもらって、ああ、こんな意見もあるんですね、みたいな感じで、

2分くらいその人に話してもらえばいいかなと思っています。

—— では、皆が、こういう意見が出たのかというのを見る時間を取るといことですか？

(木村) どうですか？ もうある程度グルーピングがされているのであれば、眺めるよりは、例えば、Aという専門家がいたら、「ああ、こちら辺はこういう感想が来ていますね。ここに「よく分からない」みたいな感想が来ていますね」とか。そういうのを、最初にその専門家に話してもらおう。

—— 本人が、ですね。やはりそうですね。

(木村) その上で、皆で意見や感想を言い合うことにしましょうか。

だから、「皆で意見や感想をグルーピングしてみましよう」はやめましようか。ここはもうサブファシリテーターにお願いすると。

—— それで、サブファシリテーターが感想をホワイトボードに貼りながらやっていたら、発表した人はそちらが気になって、次の人の発表を聞かないと思うのです。だから、ホワイトボードの裏面でやったほうがいいと思います。見えないように、後ろで、分類しながら貼っていく。そうすると、発表に集中できるじゃないですか。

—— ああ、サブファシリテーターは発表している間に貼るわけですか。

—— だから、発表はA、B、C、A、B、Cとかにしたほうがいいですよ。A、A、Aじゃなくて。そうすると、サブにも余裕ができるから。

(木村) あと、記録的には、声を小さくお願いします。

—— というか、発表を聞いている人が集中するという意味では、1人が独断で無言でやってしまったほうがいいと思います。

—— そうですね。相談なしでやったほうがいいですね。

—— ひそひそ話は気になるので。

—— そうすると、この45分は、1人が発表したら、すぐに付箋を作って、そしてすぐにそのグループに届けなといけないと。

(木村)　そうです。それで、全員が終わって、ではグループワーク 1 に入りますと言ったら、すでに付箋が貼られた模造紙がバサッと出てくる。

——　だけど、最後の発表に対する付箋を貼る時間はアイドリングがありますよ。

——　大丈夫です。それが終わってからです。

——　A 班なら A 班の人の意見がそれぞれの意見のグループに入っていればいいけれども、他の班ばかりの意見のグループができてしまう可能性がありますよね。A 班の意見がまったく入っていない島ができたときに、議論はしづらいですよ。

——　でも、「やっぱりこういうふうに見えるんだね」という議論はできますよね。

——　自分たちはこういうふうには考えなかったけど、とか。

——　まあ、そういう議論はできるか。

——　それと、議論するほどの時間はないかもしれない。感想ぐらいじゃないですか。

(木村)　意見、感想ぐらいですよ。

——　後半の市民の意見に絡んでくるでしょうね。

(木村)　絡みます。だから、そういうことも話していると、「ああ、市民ってこういうところに視線が届くんだ」という頭が専門家の中にできた上で、後半は、市民のほうはどういうことを知りたいかということ話し合うことになります。

——　3 番ですけれども、先ほど、「皆で意見や感想をグルーピング」するのはやめるということになりましたよね。それで、時間があればさらに意見や感想を言いましょうということなのですけれども、この意見や感想については、言いつばなしでいいのですか？ 付箋に拾わないのですか？

(木村)　拾ってください。

——　そのときに、元から貼られている意見に関連するような話だったら、そのそばに貼

ったほうがいいですか？ それとも、全部下のほうに羅列しますか？

—— 下に羅列のほうがいいと思います。余裕がないと思います。

(木村) では、とりあえずそうしましょうか。話の流れは、記録を作るときに分かるので。

—— 17個の意見に入っていない意見が派生的に出る可能性もありますよね。

(木村) そういうこともあるので、やはり下に少しスペースを空けておくようにして、さらに出てきた意見はそこにどんどん貼っていくことにしましょう。

—— では、線を引いておいたほうがいいですね。

—— あと、この3番って、去年で言うと第4回と同じ段取りだと思います。「質問の回答を作る」は、①と②で時間を融通してもいいかな、みたいな議論があったと思うのですが、ここでは専門家3人は完全に対等なわけですから、時間を厳守したほうがいいと思います。そうでないと、3人目の時間が2分になってしまったとかになると思うので。

—— 盛り上がってしまうとね。

—— 「盛り上がっていますが、他の方の時間が無くなってしまいますので」という感じで。

—— そういう意味では、音が鳴るタイマーが有効ですね。

(木村) グループワーク1は、参加者はファシリテーターをやらなくて、サブファシリテーターが仕切るようにしますか？

—— それでもいいと思います。

(木村) そのほうがいいですよ。グループワーク1については、サブファシリテーターにファシリテーターもやってもらいます、にしましょうか。そんなに時間がないので。もう本当に話を言ってもらっただけなので。

で、グループワーク2は、いつも通りの感じなので、ファシリテーターをつけると。

では、グループワーク2のほうに行きます。

1 番、市民は、各自が作ってきたプリントを、模造紙上部に貼りましょう。各自 1 分程度で、自分が作ってきたプリントを紹介します。市民で話し合い、「知りたいこと」をどの順番で専門家に答えてもらうか、決めましょう。ここまでは、専門家は口を出しません。市民が決めることとなります。

2 番は 35 分間あります。専門家は、市民から出てきた「知りたいこと」について、丁寧に答えていきます。市民は、「わからないこと」「新しく出てきた疑問」があれば、率直に質問しましょう。また、「わかったけど、納得できないこと」も率直に言いましょう。ここでの発言は、サブファシリテーターがキーワードを付箋に書き出し、発言者に確認しながら貼っていきます。ゆっくりと落ち着いて話し合いを進めてください。

3 番、「知りたいこと」を順番に解消していきましょう。となっています。

—— 回答する専門家が偏る可能性がありますね。偏ると面白くない。

(木村) 本当は、専門家の数を考えると、2 グループくらいが限界ではないか、という考えもあったのですが、2 グループにすると、それはそれでまとまらない。時間が長くかかるのです。

—— 市民が満足できるグループと、全然できないグループに分かれますよね。

(木村) かといって、こちらで最初から指定しても…。

専門分野もあるので、なるべく分野がバラバラになるようにこちらから配置するというのも考えたのですが、ちょっと。

—— 意図的だと言われてしまいますよね。

—— まあ、そういう力量の差もふまえて、市民が気づけばいいと思います。

—— まあ、それが普通ですよ。力量がある人が必ずしも説明をするわけではないと。

—— 知識を増やすとか、そういうことだけではないでしょう。コミュニケーションそのものの問題があるから。

—— おっしゃる通りです。だから、そこで専門家もそういう学びをすればいいと思います。

—— 自分の言ったことは通じないんだとか、あるいは、こちらの専門家は上手なのに

自分は下手だなとか。

—— ファシリテーターは市民ですか？

(木村) どちら側がいいですか？

—— 専門家がファシリテーターをしていたら、答えられないですよ。

—— 市民がいいと思います。

—— どちらにせよ、専門家に力量や経験の差はあるのだから、専門家全員が必ず答えるようにしたほうがいいと思います。全然答える機会がない専門家が出てしまうのは、せっかくこういう貴重な場で、そういう経験をしないで終わってしまうのは、もったいない。

—— 順番に答える？

—— 順番というか、市民から3つ質問が来ている、どう答えましょうか。3人だったら、1つずつ答えましょうとか。何も答えない専門家が出ないようにしたほうがいいと思います。

—— そこは、サブが気をつけていて、言わないと駄目ですよ。

—— だったら、進め方の説明をするときに、専門家の方で分担してくださいと言ったほうがいいんじゃないですか。

(木村) 質問は、3つではないのですよ。1枚に10個くらい書いてきているから。

—— ああ、そうか。それに全部答えるのですか？

(木村) 全部ではないです。時間で決めるのです。

進め方の続きを読みますけれども、4番、付箋全体を見直して、解消できた疑問には(済)マークを、まだ解消できていない疑問、答えに納得できない疑問には(未)マークをつけてみましょう。それをやって、ここまでは解消できて、ここまでは解消できていないというのをちゃんと明確化する。

その上で、5番、市民は「専門家の説明を聞いてどう思ったか」、専門家は「話してみてもうどう思ったか」を付箋に書いて、模造紙に貼っていく。時間があれば、意見、感想を言い合う、というような形にしています。

まずは、どこまでちゃんと疑問が解消されたのかが見えるようにする。本当は、「理解したけれども納得できない」は（未）ではなくて、違うマークがほしかったのですが、そこまでやると難しいかなと思って。なので、市民が納得できないものは（未）マークをつけると。

—— 3人市民がいて、納得した人としらない人がいるときにどうするのですか？

—— （済）が3個つくかもしれないし、（未）が2個、（済）が1個かもしれない。全員に書いてもらうということですよ？

（木村） そうですね。これは全員に書いてもらわないと。

—— 全員に書いてもらうのだとしたら、シールにしたほうがいいかもしれないですね。

（木村） では、青が（済）、赤が（未）にしましょうか。

—— それを市民に渡しておいて、納得できたら青を貼る。納得できなかったら赤を貼る。

（木村） はい。

シールは、疑問の付箋に貼ることにしましょう。要は、市民から疑問が出てきます。最初はプリントに書かれています。プリントに、順番が①、②と振られていく。それとも、疑問を改めて付箋に書き出すのは無理ですよ。だから、やはりプリントに①、②と書いていって、その横に赤いシール、青いシールを貼ってしまう。

—— では、シールは宿題にしていた原本に貼っていくのですか？

（木村） はい。

—— 1人10件だとすると、30件くらいあるから、シールは何十枚も渡さないといけないということですね。

—— でも、答える時間に制限があるので、

—— 1人当たりの答えてもらう時間を区切るのですよね？

（木村） 1番では、市民3人がどんなことを知りたいか持ち寄って、その中から、市民の

中で話し合ってもらって、まずはここから、次はこれというふうに決めるのです。

—— 3人分の質問を全部まとめて、俯瞰してみて、その中からピックアップしていく？

(木村) はい。ピックアップして、どんどん解消していく。

だから、シールも、あ、これは終了したと思ったら、もうその場で貼りますか？

—— 本当に(済)でいいかどうかですよ。分かったけど納得できないとか。

(木村) それは(未)です。

—— ええと、4つありますよね。「理解でき、納得できた」「分かったけど納得できない」「分からないけど、なんか納得できた」。

—— 「分かって納得できた」だけが青です。

—— 圧倒的に(未)が多いと思います。

—— まあ、そうですね。

(木村) で、専門家が話していると、途中で専門用語が出てきて、そうすると市民のほうから、「それはどういう意味ですか？」と出てきたら、サブファシリテーターさんが赤い附箋に質問を書かないといけないのです。

1個質問を決めて、それに対して話していくと、バーッと質問が出てくると思うのです。だから、1個の疑問に対して10分とかではなくて。上位5番目くらいまで決めてもらいましょうか。

—— 市民3人分の質問から、1番から5番くらいを順位づけしてくださいと。それをやったほうがいいですよ。自分が出したものよりいい質問を出している可能性もあるわけだから。

—— それを5分でできるかなあ。

(木村) それとも、1番、2番を繰り返すようにしましょうか？ まず質問をざっと見て、市民の人たちの中で、1番目にどれに答えてもらうかを決める。そして、その疑問が解消できるところまで話してもらう。で、疑問が解消したか、納得できないけど、もういい、と

なったら次の質問を選ぶ。

—— そうしたら、もうそこでシールも貼れますよね。

(木村) 貼れます。だからそこで貼ってしまう。

—— では、1番、2番、4番を繰り返すということですね。

—— 更に出てくる質問のことを、我々は「更 Q」というのだけど、更 Q がどんどん増えるはずなのです。Q があって、何か答えると、更 Q ができる。その更 Q に答えていると、そこから脱出できないから、そこで打ち切って、やはり皆が考えてきたオリジナルの質問にできるだけ時間を割いたほうが良いような気がします。

—— 次の質問に行くまで何分かって決めないと、1個で終わってしまいますよね。

(木村) 1個で終わってもいいかなと思っているのですけれども。逆にいうと、更 Q で止める、ではなくて、更 Q をどんどん出して行って、ああ、この1個の質問に対して、これだけ深く話さないといけないのか、これだけ話してもまだ理解されないのか、それを1回経験しておくといいかなと思って。

—— それも面白いですね。

(木村) で、もしそれが10分くらいで終わってしまったとしたら、次に行くと。

—— また次の1個を選ぶと。

(木村) はい。逆に、全然終わらなかったら、35分で1つだけかもしれない。

—— その更 Q というのは、どこにどう貼ればいいですか？

(木村) 基本的には市民からは疑問がたくさん出てくるはずなのです。赤い付箋は基本的には質問になると思います。

—— それは、場所を選ばずに、バーッとどこかに貼っていくのですか？

(木村) まあ、そうなりますね。

—— そのときに、専門家の答えは書かなくていいのですか？

(木村) 答えも書いてもらったほうが良いと思うのですが。

—— サブファシリテーターが書くのですか？ それとも専門家？

(木村) サブファシリテーターです。

—— 専門家がどう答えたかによって、次の質問が出る、という流れがあるから、本来は答えも書く必要があるけど、専門家の答えを拾うのは難しいと思いますよ。

—— でも、市民向けの説明なわけで。私たちが書き取れないくらいの説明だったら、絶対に市民には分からないですよ。

(笑)

(木村) では、やはり書いてもらいましょう。

—— やはりキーワード拾いでいいんじゃないですか。

—— 説明するときは、まずワンフレーズで、最初に結論だけ言ってくださいと。

(木村) 絶対に無理ですよ。そんな専門家はいないですよ。

—— でも、キーワードにしようと思っているうちに、前に言っていたことが分からなくなってしまう、というのが多いじゃないですか。

—— そうですよ。何を言いたいのかは最後まで聞かないと分からないけれども、前のほうを忘れてしまいますよね。

(木村) だから、「ゆっくりと落ち着いて話し合いを進めてください」と書いてあるので。なので、そこはコントロールしてください。

—— 附箋の貼り方なのですけれども、最初に選んだひとつの質問に更 Q が出てきた場合、それをツリーのようにするとか、それに対する答えを貼っていくとか、系統づけなくていい

いのですか？

(木村) いや、系統づけてください。

—— やはりこうなっているわけですか？

(木村) どうですかね。今の話だと、むしろ、そこは普通に重ね合わせて、ではこれを 1 番にしましょうといったら、それをパッと書いてしまったほうが早いですね。

—— それか、ここにこうやっていくつか出ているでしょう。3人で話し合っ、この人のこの質問がいいとなったら、ここに①と書く。で、もし時間があって 2 つ目に入ったら、②を選んだら、②と書く。

(木村) では、そうしましょうか。

—— タイトルは改めて付箋に書いたほうがいいのですか？

—— 時間があつたら書いてもいいけど、ここにもう書いてあるわけだから。

それと、この質問とこの質問は言い方が違うけど同じような質問だから、となつたら、こことここを①にして、ここに書けばいいんじゃないですか。

—— たぶん、放射線の健康影響に関する質問が一番多くなるような気がする。

(木村) そうでもないですね。補足をメールで送ったのですが、あまりその通りには書いてきていない人が多いです。

—— まあ、ばらけているほうが、議論としては面白いけれども。

(木村) では、とりあえずそういうふうにしますね。まずは 1 つ決めて、①と書いて、①について話していく。

—— 専門家のプリントを貼るのだから、やはり市民のプリントもちゃんと貼ったほうがいいですよ。

—— 模造紙は多めにお願いします。

(木村) それで、シールまで含めて、貼りながら進めていく。

—— 最終的には、①の質問の隣に、赤か青をそれぞれに貼ってもらうわけですね。

(木村) そうなります。

—— その進め方ならば、取り上げるテーマはせいぜい 10 個くらいのような気がします。

—— 10 個も行かないでしょう。2 つだと思います。

—— そうすると、赤、青のシールは、先ほどは何十枚と言ったけれども、せいぜい 1 人 10 枚くらいですか？

(木村) もっとあってもいいのではないのでしょうか。更 Q にも貼るので。

—— ああ、先ほど私がせいぜい 10 個と言ったのは、更 Q も含めて 10 個くらいだろうということです。だから、大元の質問はせいぜい数個でしょうね。

—— どこまで話したら 1 つの質問が終わりになるのですか？

(木村) 大元の質問に 3 つとも青がついたら、もしくは、赤だけでもういいっていうときは 2 番目の質問に行くことになります。

—— だから、「この話はもういいよ、次の質問に答えてほしい」というふうになったら、赤ばかりでも次に行く可能性もあると。

—— それもあると思いますよ。そのほうが多い気がする。

—— そういう観点から言うと、ファシリテーターは市民のほうがいいですね。

—— 更に出た質問に答えてもらいますよね。それについても、もういいかと思ったら、そこでシールを貼るのですか？

(木村) はい。大元の Q だけではなくて、それから派生した Q がたくさん出てきて、そういう質問にもシールを貼っていくことになります。

—— 派生した質問は、「①-1」とか書いて、回答に満足したらそれにシールを貼っていく、というふうにすればいいのですよ。

—— それで、派生の話がだいたい終わったら、大元のところにシールを貼って、次に行く。

(木村) そうですね。更 Q が分かっていないのに大元には貼れないはずなので。「では、ずいぶん話してきましたけれども、ここで①にシールを貼ってみましょうか」でもいいわけです。それで貼ってみて、「もういいや、赤だけど次に行こう」となったら、次に行く。

—— そこは市民のファシリテーターがやるのですね？

(木村) そうです。

—— この構造が一番大事だと思います。そうやって掘り下げていけば、どんどん質問が広がる。で、全部が青になるというのはなかなか難しく、赤のままでたぶん終わる。それで次に行く。そういう構図になるといいですね。

—— 市民のファシリテーターは、回すことに専念して、あまり自分では発言せずに、シールを貼るのですね？

(木村) でも、発言もすると思いますよ。ファシリテーターは発言しない人いないから。

—— 先ほど、専門家の回答機会が均等になるように、と言ったけど、更 Q というと、最初から分担するのは難しいから、偏らないように、今度は A さんばかりではなくて、B さんのほうもお答えくださいませんか、とか。

(木村) そうです。回答者のほうをちゃんと回してもらほうが重要です。

—— そこがうまくコントロールできないと難しい。

(木村) はい。なので、そこに関してはサブファシリテーターのほうで見てもらって、どうしても 1 人の話だけで終始してしまったら、他の専門家の話も聞いてみませんか、というふうに言ってください。

—— 「専門家にもいろいろな意見がある」というコメントがアンケートに出ているわけ

だから、できるだけ全員で意見を出し合おうと。

—— そのときに、明らかにこの専門家の答えを聞いていても、市民は満足していない、分かっていないというのは、聞いていれば分かると思うのですよ。そのときに、それを早めにファシリテーターにお知らせするのか、ファシリテーターが気づくまで待っているのか。どちらがいいのですか？

(木村) まあ、気づくまで待ってもらうのですけれども。

ええと、いろいろな専門家に答えてもらおうと、この人の答えは分かったけど、この人の答えは納得できない、みたいなケースも起こりますよね。そのときは疑問の付箋にシールを貼るのか、答えの付箋にシールを貼るべきなのか。

—— AさんとBさんの意見がバッティングする可能性もありますよね。「それは違うよと。こういうふうに言わなきゃ駄目だよ」ってやり始める可能性もある。

(木村) ありますね。どうしようかな。疑問の付箋のほうにシールを貼ったほうが良いと思っていましたけれども、答えが出てきたら、その都度シールを貼ったほうが良いですか？

—— あまりたくさん貼ることになると、大変ですよ。

—— シールを貼るタイミングもイメージが付きづらいのですけれども。

—— 説明がひと段落したところでいいんじゃないですか。

—— 1人の専門家の言っていることは分かったから、青を貼るけれども、同じことを次の専門家が説明したら、分からないから赤を貼るというのは、いいかもしれない。

—— だから、やはりキーワードの書き取りは大事なのですよ。

—— 1つのテーマを2人に説明させないほうがいいのかも。

—— でも、2人でしゃべるでしょう？

—— 説明を聞きながら、「あなたの言うことは違うでしょう」と言う人もいるかもしれませんよ。

—— それはそうですね。それは制約できないですね。

(木村) まあ、あくまで疑問の付箋にシールを貼りましょうか。ひと段落したら、この質問について、シールを貼りましょうと。

—— 質問の付箋にシールを貼るわけですね？

(木村) そうです。

—— え？ 専門家の答えの付箋には貼らないのですか？

(木村) そちらに貼るとややこしくなるから、Q だけにしましょう。

—— 片方の説明は分かったけど、片方の説明は分からないというときは、「分からない」のシールを貼るのですか？

—— うーん、でも、2 人の専門家がいて、片方が納得できる説明をしてくれたら、「分かった」だと思うのですが。「この人の話は分からなかったけれども、こちらの説明を聞いて分かった」だったら、「分かった」を貼るんじゃないですか？ そこに疑問は何か残りますか？

(木村) 赤いシールを貼られたときは、今度は、「なぜ赤いシールなのですか？」と聞けるので、そうしたら更なる疑問も出てくるし、「納得していないから赤いシールを貼りました」だったらそれで終わりだし。そういうふうにしましょうか。

—— 予行演習をしたいですね。

—— そうですね。大変だと思います。

(木村) グループワーク 2 も、サブファシリテーターさんが仕切ったほうがいいのかもしれないですね。今回は、段取りが複雑なので。

—— 私はそう思います。そうしないと、市民の方が質問を聞くのに集中できないと思います。

—— 一応市民のファシリテーターは立てるのですよね？

(木村) いや、まったく立てないで。竹中君、どう思いますか？

(竹中) まあ、去年とは違って、サブファシリテーターに対する不信が出てきていないので。そういう意見が出ていたらまずいかなと思うのですけれども、まったく出ていないので。

(木村) では、ちょっとやってみましょう。それでまた出たら、ああ、やはり駄目だったということ。

(前参加者) それは今回はないと思います。初めにちゃんと説明があったので。我々のときは何もなかったから、それに反発があったのだと思うのですけれども。今回は丁寧に説明していただいているので、それはないと思います。

(木村) そうしたら、今回はサブファシリテーターが話し合いを回すということで、よろしくをお願いします。

—— 書き取るのが1人でできるかどうか。

—— 書きながら進行しないと間に合わないでしょうね。

(木村) では、ここに関しては、だいたいそういうイメージです。私もイメージを紙に落としてきますので。

そうすると、最初の5分はなくて、40分まではきっちりとQ&Aでやっていくと。40分になったら、時間で切ってください。

次は5番に行きます。説明を聞いてどう思ったか。話してみてどうだったか。シールはその都度貼っていくので、40分になったら一旦終了して、お互いにどう思ったかを書いてもらう。5番は、また別の模造紙にしたほうがいいですよ。1番から4番で1枚、5番で別の1枚という形にしたいと思います。

少し変えるかもしれません。もしかしたら、「グループワーク1の様子も見て、どう思ったかを話しましょう」にするかもしれませんけれども。それはまた直前打ち合わせで皆さんに確認しますので、よろしくをお願いします。

—— すみません、最後の6番の、「時間があれば、さらに意見や感想を言いましょう」の意見や感想は、書き取って貼っていくのですか？

(木村) はい。

—— 5、6番で1枚の模造紙？

(木村) はい。ここは1枚の模造紙です。5、6で新しい模造紙にします。

—— 5、6番が重要ですね。

(木村) ここが重要です。

—— そうすると、グループワーク 2 の発表は、どういうことを発表してもらうことになるのでしょうか？

(木村) こんな疑問について話してもらった結果、この辺は解消されました。ここは解消されません、が前半です。その上で、市民、専門家はこういう意見を持ちました、ということをお話してもらいます。

—— 発表者はくじ引きですね？

(木村) 発表者はくじ引きです。専門家、市民、1人ずつです。だから、今回くじ引きなのは、それだけです。

できれば、前半の専門家の発表の順番もくじで決めたいところですが。

—— 別にできますけど。

(木村) できるけど、下手をすると、A班が固まるとかがあり得るので。

—— いや、Aの人に1番と4番と7番を割り振ってあげば。

(木村) ああ、そうか。そうしましょう。では、そういうことで今回のくじ引きはよろしくお願ひします。

だいたい以上になります。今日の議論を受けて、改変して、皆さんにお知らせしますので、よろしくお願ひします。

(前参加者) 専門家が3分話すとき、タイムキーパーは1分前と終了で出すのですか？

(木村) はい。

—— それと、3分だったら、音が鳴るキッチンタイマーのほうが良いと思います。

(木村) ええ、そのほうが良いです。今回は時間厳守でいかないといけないので、鳴らしたほうが良いと思います。

—— あと、グループワークで、そろそろここに入ったほうが良いという合図が、前は付箋で回りましたが、やはり誰かにお知らせいただきたいと思うのですけれども。

(木村) はい。それは私がやります。

ということで、結構大変なグループワークになりそうですが、よろしくお願いします。

—— 市民が遠慮なく意見を出せるかどうか。それが重要な点ですね。

—— 雰囲気的には、言えるような状況になっているのではないかと思いますけれども。

—— そうですね。第1回、第2回の状況を見ていると、そういう雰囲気があるから、期待できますね。

(木村) はい。

3. その他

(木村) それでは、今日はここまでにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上